

尾鈴カルデラの痕跡と児湯の自然探訪 (2016. 8)



2016年度企画で、川南湿原 ---- 大御神社 ---- 小丸川揚水発電所下部ダム池を訪ねた。尾鈴山系が火山性であることは、「尾鈴山北東部エコウォーキング」の時に知った。2005年のことだ。主目的は、石並川の上流部を訪ねることと、山麓の歴史を学ぶことだった。その時目にしたのが、林道脇の巨大な柱状岩だった。ずっと気になっていたが、日向市の景勝「馬ヶ背」等で見られる柱状岩との関係が認識できるまでには、少し時間が必要だった。

福島第一原発事故以降、原発と火山の関係が表立って議論されるようになり、巨大噴火のことが火山学者や研究者等からたびたび語られるようになった。地域の研究者も、勉強会を開いたり、フィールドで市民を案内する機会がふえたようだ。私自身も火砕流露頭などを案内して頂いたり各地の博物館などを訪ねる機会も増え、大地の成り立ちも考えるようになった。

分かりきったことではあるが、私たちは巨大噴火のはざまに生きている。今も地球は生きているのだ。日本そのものが世界有数の地震国でもあり火山国でもあるが、中でも中九州から南九州にかけてはカルデラ博物館のようである。阿蘇は誰でも知る巨大カルデラだが、桜島を有する錦江湾奥の始良カルデラ、指宿から南大隅にまたがる湾入口の阿多カルデラ、薩摩半島南海域の鬼界カルデラ、もう少し時間をさかのぼれば小林カルデラ、加久藤カルデラもある。だがこれらは数十万年までの過去への遡りだ。尾鈴

カルデラは、もっともっと古かった。

日向市伊勢ヶ浜に隣り合って大御神社がある。海岸には見事な柱状岩が立ち並ぶ。神社にある説明書では、次のようにある。「今から約 1500 万年前のこと。神社の沖にある海底火山の活動によりこの海岸一帯は多量の火砕流が押し寄せ堆積しました。そして長い年月をかけて固まったのが柱状節理（溶結凝灰岩）です。」と。そう、尾鈴山の活動期は 1700 万年から 1500 万年前頃のことであり、活動の中心は 1500 万年前頃のようなのだ。

大御神社には、その柱状岩と隣り合って「さざれ石」というものがある。学名は「庵川礫岩」である。巨大噴火から時間を遡ること 500 万年、即ち今から約 2,000 万年前頃のことと考えられている。今の日本列島が出来上がる前のことだ。果てしなく広がる平野部と浅くゆったりした海岸、そしてゆっくりと流れている大川をイメージすればいいのだろうか。河口付近には大量の細石が溜まり、粘土や砂と混じり、長い年月を経て巨石になったという。大御神社をとりまく岩石は、そういう地球の歴史をイメージできる場所だ。



ところで、この時の巨大噴火は、日向市沖の海底である。巨大な火砕流を伴い、現在の尾鈴山の方へも向った。冷えて固まる時に、一部は巨大な柱状岩をつくり、巨大な岩石の塊にもなった。尾鈴山に行けば、たくさん滝が目を楽しませる。名を知られた矢研の滝や白滝を筆頭に、大小様々の美しい滝がある。そして滝の

水は平野部を通り太平洋へと向う。平野部と呼ぶにはやや小高いが、10号線のすぐ近くに伏流水が湧き出し湿原をつくっている場所がある。標高約50m、面積33,000平方メートルの川南湿原である。宮崎県が誇る湿原の一つだ。

1974年(昭49)に国の天然記念物に指定された。ここでは川南町文化財保護審議会委員の方に案内して頂いた。観察用の木道も整備されているので歩きやすい。ここでしか観れない沢山の植物が目を楽ませる。しかし、残念なことが一つ。盗掘が多いのだと言う。そのためにフェンスが作られた。それでもそれを乗り越える輩がいたようで、最近では防犯カメラも作動とのことだ。トッテいいのは、写真撮影だけにして欲しい。ここではサギソウや食虫植物のイシモチソウなどの希少種も観ることができた。湿原の上手は池となっている。その池ではトンボも数多く目についた。私が好きなのは、伏流水がわき出す付近を中心にひらひらと飛ぶチョウトンボだ。カイツブリもいた。バンもいたようだが、私の目にははっきりとはうつらなかつた。

青木幸雄(宮崎の自然と未来を守る会)